

## 二、『白黒の空』

0

「狼、またアンタ日向ぼっこしてんの？」

「ん？ ああ。今日、晴れてたからな」

狼はひび割れたコンクリートの地面に直接横になり、ぼんやりと空を見上げていた。ここは狼や零那の住むボロアパートの屋上だった。

屋上、というよりは屋根である。

小さな給水塔がひとつ端にあるだけで、他には何もない。

そこに行くには錆び付いた非常梯子を使わなければならず、とても普通の人間は行こうとは思わない。

だから、そこは二人にとってささやかな秘密の場所だった。

「んー。本当にいい天気ね。まさに夏真っ盛りって感じ」

零那は大きく伸びをし、空を仰ぐ。

「まだ七月だけだな」

「また、そんなつまらないことを・・・」

「でも」

「ん？」

「・・・俺はこの空嫌いだな」

「どうして？ 雲一つない快晴なのに」

「だからだよ」

「え？」

「なんかさ、雲のない空をずっと見上げるとさ、自分が何処にいるか分かんなくなってくるんだよ。雲が一つでもあれば、そこが空だって分かるんだけど、雲がないと、どこか別の場所において、自分が永遠に戻って来れないような気がしてな」

「じゃあ、ずっと見てなきゃいいじゃない」

「・・・それもそうだな」

言って、狼は苦笑した。

1

交差点で、男が信号待ちをしていた。

年は二十ほど。

何かで染めたのだろうか、白色の髪を耳が隠れるほど伸ばしている。

スキーの時にかけるサングラスのようなバイザー型のサングラスをかけ、服装はラフなタンクトップに迷彩色のスラックス。

男はただ、信号が変わるのを待っている。

それだけならば、普通の、どこにでもあるありふれた光景だった。

違うのは、男が青信号なのににもかかわらず、信号待ちをしていたことだ。青信号なのに、青信号を待つように、男は待っていた。ずっと。

「もしもし」

高校生ぐらいの青年が、男の肩を叩く。

「信号、とくに青になっていきますよ」

「・・・ああそうか。今日は人と車が少なくなてな。気付かなかった」

男は言いながら、空を見上げる。

「貴様に問おう」

そして、再び青年を見つめる。

「貴様の空は何色だ？」

「え？ 青・・・じゃないんですか。ほら、今日晴れてるから」

「そうか」

軽く嘆息し、男は軽く自分の右手を動かす。

「では、その空、視せて貰おう」

刹那、男の右手が、腹部を立方体状に舐った。

「え？ ええっ」

青年は、何が起こったか分からないという顔で自分のまるで何かに切り取られたかのような立方体状の傷口を見やる。

傷口に何度か触れて確かめる。

まごう事なき立方体。

何度触ってみても、立方体だった。

「何で・・・俺・・・死ぬんだよ・・・」

理不尽だと言わんばかりに呟き、青年はどさりとその場に崩れた。

「・・・貴様でも駄目だったか」

男は無表情に呟き、ぶん、と手を振って血糊を払う。

「邪魔したな」

興味なさそうにそう呟くと、男は横断歩道を渡った。

「で、これが今回の依頼じゃ」

少女は、今時珍しい達筆な筆で書かれた紙を男に手渡した。

年は十四、五才。

黒絹を連想させる艶のある髪を腰まで伸ばし、服装は服装は十二重<sup>じゅうにひとえ</sup>とは言わぬも、平安時代の姫君を連想させる薄い翠色の和服。

この二十一世紀となって久しい現代日本において、テレビでしか拝めぬような容姿の少女だった。

「依頼料はいつも通り、金塊で払う。異存はないな？」

「大ありだ」

男は不満そうに言った。  
年は二十ほど。

雑に染めた金髪に、夏だというのに鉢付きの黒い革ジャンを羽織っている。

それだけならば、『今時珍しい奴』程度ですまされるのだが、彼をそれ以上の存在に仕立て上げているモノがあった。

右目につけられた片眼鏡。

・・・片眼鏡である。

アルセーヌ・ルパンでもあるまいし、そんな変なモノを日常生活でつけているものなど、日本中探してもこの男ぐらいしかいないだろう。

はつきり言って、『変人』と言うより『変態』だ。

「言っただろう。俺は人は殺さねえ。やるのはあくまでも『能力封印』だけだ。んなこと、カタナにでも頼め」

「人を殺せなくなった殺人鬼、か・・・面白いものじゃのう。その台詞、五年前の殺戮中毒者の貴様に言っただけだ」

少女は豪快に笑い、手に持っていた鉄扇をバン、と開く。

「別に殺さなくてもいい。零神<sup>ぜろかみ</sup>の連中は奴の抹殺というか、処分を望んでいるが、我々にはそんなもん関係ない。我々七太祖<sup>しちたいそ</sup>の目的はあくまでも、未覚醒者<sup>ウイズダム・ワイザード</sup>による異常が地上に蔓延することを防ぐことじゃ。まあ、奴らは妾の家<sup>わいわ</sup> 香耶<sup>かぐや</sup>の分家じゃから、七太祖の決定に逆らうことはせんよ。どうじゃ？ 満足か？」

「ああ・・・なあ、お師匠。そいつ、零神 空<sup>そら</sup>だったか？ そいつ、やっぱり半端<sup>ウイズダム・ワイザード</sup>者<sup>ウイズダム・ワイザード</sup>なのか？」

「・・・そうじゃよ。親近感を感じるか？ 狼」

少女はシニカルな笑みを浮かべ、男 神鎌 狼に問う。

「いや・・・別に。確認しただけだよ。でさ、そいつ血に狂ってると思うか？」

「いや、狂ってはおらぬな」

「十人以上、プチ戮ってるのにか？」

「ああ。被害者の死体、綺麗じゃろ？ 立方体に剔られている以外、何処も外傷はなくて」

「確かに」

狼はテーブルに置かれたスポーツ新聞に目を落とす。

一面トップに、大きく『連続猟奇殺人事件ついに十二人目!!』という記事が踊っていた。

「・・・さすがの『破界者』<sup>はかいしゃ</sup> 零神も焦っているらしいの。今日も、七太祖へ奴の処分を要請してきたわい」

「ってかさ、自分達で処理すればいいのによ。出来んだろ？ あっちも異界の実働部隊ほどの戦力はないとしても、自分達で兵隊抱えてるんだからさ」

「無理じゃよ。いくら、殺害、虐殺、惨殺を生業とする『破界者』 零神でも、所詮は人じゃ。束になったところで、あの人外に敵うはずもない。人外には人外をぶつけるしか、対抗手段はない」

「悪かったな、人外で」

狼はばつの悪そうな顔をする。

「いや、その代金はタダらしいぞ」

「じゃあ、何だよ？」

「お茶代だそうじゃ」

「はあ？ あ、葉を何度も天日に干した色なんかほとんど出てねえ、あの白湯に等しいあれが四万円だあ？ そんなこと、ひでー暴力バーでもしねえぞ。つーか、何年前の話だよ……」

「まー普通はそうじゃが。ちなみに、例によって勝ったら、タダにしてやるらしいぞ」

「……上等じゃねえかクソジジイ。また蹴散らしてやらあ！」

狼はベキベキと指を鳴らし、残忍に笑う。

（……まったく、よくやりおるのう。正宗の奴、よほど狼がお気に入りに見える）

少女はそんな狼をぼんやりと眺めながら、そう思った。

「で、依頼は受けてくれるのか？」

「おう。確かに了承したぜ」

言つて、狼は足早にその場を去る。

「……よほど、この店にいたくなかったらしい。」

「まったく……」

そんな狼を見て、少女は呟く。

「人を殺せなくなった殺人鬼と、人を殺すしかなかった殺人鬼。一体どちらが幸せなのかの……」

呟き、

「愚問じゃな」

と、シニカルな笑みを浮かべ、テーブルの上に置かれたパフェを口に運んだ。

2

「零那。依頼が入った。今すぐ」

言いかけ、狼はソファーに腰掛け足をテーブルに投げ出している男に目を向ける。

年は三十ほど。

だらしなく肩まで伸ばした黒髪を雑に束ね、顔は無精ヒゲに左頬には大きな傷跡。皺だらけのワイシャツの胸をはだけさせ、だらしなく着ている。

それはファッションというよりは本人が怠惰だからであろう。

日本にいるよりかは、中東などの物騒なところが似合っていそうな男だった。

「よう。お帰り。邪魔してるぜ」

男は胸から煙草の箱を取り出し、煙草を一本口にくわえ、ジッポで火を付ける。

「ホントに邪魔だぜ、この幼女偏愛刑事」

「うるせえ。片眼鏡偏愛者に言われたくねえよ」

男は煙草を口にくわえたまま、下品にニヤニヤ笑う。

「……で、何の用だよ？ 五月雨 さみだれ 亮警部補殿。遊びに来たんじゃねえんだろ？」

「零那ちゃんを愛でに来た」

「帰れ。帰らねえと警察呼ぶぞ」

「いや、俺が警察だし」

「依頼だつてさ。アレの」  
いつまでもアホな言い合いが続きそうだと察したのか、栗色のツインテール少女がテレビを指さす。

テレビでは東京都内で最近出没する殺人鬼について報道していた。  
被害者は端は奥多摩から、都心まで幅広く及び、被害者数は十二人にまで上る。

今年の六月の中旬に最初の被害者が現れ、それから一月経たないまでにそこまでの人数が犠牲になったということは異常だ。

だが、それ以上に異様なのは犯行の手口。  
死体が立方体状に剔られているのだ。  
立方体。

普通の凶器ではとても出来ぬ犯行故に、警察は凶器特定に頭を悩ませている。  
頭を悩ませている間にも被害者は増え続け、とうとう十二人になってしまったという訳だ。

「で、ソイツの手口。おそらく、お前さん側だと思っただが、どうよ？」

「多分そうだろうな」

狼はソファアの背もたれに腰掛け、腕を組みながら頷く。

「で、お前は俺に何の依頼をするんだ？」

「せっかちな。まあ、強いて言うなれば、能力の無効化だな。お前がよくやってる奴。  
逮捕とかそういうのは俺がやる。なあに、凶器なんかはでっち上げればいいんだし、そう  
難しくはねえ。それで前金三十万。成功報酬十万でどうだ？」

「成功報酬はそれでいいが、前金五十万」

「高けえよ。三十五万」

「調査費など諸経費込みで五十万」

「じゃあ、四十万」

「もうちょっと」

「四十一万」

「・・・セコいな、普通のお仕事以外に怪しげな仕事しまくってる悪徳刑事なのに」

「何を言う！ まだ幼女に対して猥褻な行為に及んでいないぞ」

「やったら、マジで警察に突き出す」

「わくったよ、じゃあ、四十五万だ。その代わり、一切、追加資金提供はなしだ」

「本当にセコいな・・・」

狼はポリポリと頭を掻き、事務机へと書類を取りに行く。

「じゃ、これにサイン。あと捺印。できれば血で」

「そこまでするのかよ」

「する。お前は本当に信用なんねえからな」

「信用なんねえのはお互い様だよ」

亮は腰にぶら下げたホルスターからスイス製のアーミーナイフを取り出し、親指にプレ  
ードを当て、僅かに傷つけ、書類に捺印する。

「前金はいつもの口座に振り込んでおく。んじゃ、いい結果を待ってるぜ」  
言うや、亮はすくつと立ち上がり魔術師の巣を立ち去った。

「・・・あの野郎、また絨毯に灰落として行きやがった」

狼は忌々しく、少し焦げたペルシャ絨毯を見下ろす。

「いいじゃん。もう一枚買えば」

ツインテールの少女はつまらなげに呟く。

「・・・お前、これ一枚いくらすると思ってるんだよ？」

「依頼料ぐらい？」

「馬鹿。高級車とほぼ同じだ」

「絨毯一枚で!」

零那は思わず、自分の下にある絨毯を飛び避けた。

「ああ。だが、その代わり、普通の絨毯と違って悠久の時の中、ほぼ姿を変えることはない。ちなみに、こいつはちよつと特別でな。地上ではヘタすると値段がつけられん」

「盗んできたの？」

「違えよ。貰ったんだ。饞別に七太祖の一人にな」

「へー」

あんまり感心がないのか、少女は抑揚のない声で応えた。

「でさ、どうしてあんな依頼受けたの？ いつもなら、もうちよつとぶっかけるでしよ？」

「ああ。同じ仕事の依頼を異界からも受けてな」

「二重取りじゃん、それ」

「いいんだよ、どうせ亮だし」

狼はまだ気にしてるのか、焦げた絨毯を何度も見下ろしながら言う。

「もしかして、その犯人も分かつてるとか？」

「ん？ ああ。零神家の失敗作、零神 空だ」

「ぜろかみ？ 誰？ それ」

「零那、お前、本当に知らないのか？」

狼は怪訝な顔でツインテールの少女 零那に尋ねる。

「うん」

「ったく・・・。いいか、零神つてのは香耶を本家とする芦屋、あしや緋遙などの分家の一つだよ。香耶の家系は結界を得意とする家系で、零神もそれに漏れることなく、結界の能力を得意とする。まあ、緋遙の『扉を開ける力』と同じで、零神もかなり偏ってるがな」

言つて、狼は「まあ、緋遙のその力はもう継承する人間がいなくなつちまつたから、今じゃほとんど普通の家系だがな」と付け加えた。

「ちなみに、『古き血』にはでかい家系が香耶の他に、ちりと杜堵、くくつ傀儡などあるんだが、めんどくせえから説明はなしだ」

「あつそつ。で、零神は偏ってるって、どんな能力なの？」

「結界の応用による破壊 即ち、破界だ。空間断絶の応用で物体を外界から切り離しちまつんだよ。それで傷口が立方体状になる」

「それで」

零那はちらりと、テレビを見る。

「・・・でもさ、どうしてあんなに殺人を繰り返すのよ？」

「零神は元々、香耶に仇為す者の暗殺や虐殺、護衛などが主な任務だったんだよ。要するに殺しのプロだな。あの家系を表す言葉は二つ名である『破界者』以外にも結構多いが、俺としては一番しっくりくるのは『殉血の狂鬼』だな。イカれちまった奴らにやびつたりさ」

「質問の答えになってないんだけど？」

「ようするに殺しつてのが、悪いこと、善いことなんて、そんな些細な二択すら持つてないんだよ、あの家系は。それどころか、趣味ですらもねえ。強いて言うなれば、殺戮人形。何も感じず、命じられたままに殺戮を実行する。そんな中で一番、キチまってるのが空

零神 空なわけ。奴は自身が半端者だという理由で勘当喰らっていて、もう正確に言えば零神じゃあないんだが。そいつはなんつーか、要するに殺してないと生きていけないような奴でな。殺人依存症って感じた。んな、症状あるかどうか知らねえけどな。零神にもみ消された件数を今回の事件に換算すると軽く百件は超えてるぜ」

「ねえ」

「何だ？」

「そいつ、わたしの家族を皆殺しにした奴かもしれない・・・」

「・・・殺し方が、似ているのか？」

「分からない。あの時のこと、何も憶えていないから」

「そうか」

狼は片眼鏡を押し上げ、静かに呟く。

「どうする？ この仕事、降りるか？」

「いや」

零神は首を振り、目を 眼を見開く。

「もし、本当にそいつがわたしの家族を皆殺しにした奴なら」

その眼は威圧するわけでもなく、ただただ狼を見つめていた。

虚ろに、

そして、狂気を孕みながら

「原型を留めることなく、なじ切り殺す」

自分の瞳に映るもの。

それは人。

それは町並み。

それは空

普通と何も変わらない、

何の変哲もない風景。

ただ違うのは、それが全部白黒だということ。

白黒。

色がない。

ない。



ない。ナイ。亡い。無い。  
何も無い。

全てが死んだセカイ。  
人も。

町並みも。

空でさえも

そんなセカイに、ただ一人佇む。

それは丁度、墓場で墓標に囲まれるのと同じ。

怖い、とは違う。

どちらかというと、淋しいに近い。

・・・そんな、感じ。

雑踏から聞こえてくる笑い声。

楽しそうな笑い声。

彼らには色がある。

綺麗な色が。

人にも。

町並みにも。

空にも

色がある。

自分とは違う風景を、彼らは見てる。

・・・今、

自分が一番欲しいもの。

それは、色

「でもさ、探すって言ったって、どうやって探すわけ？」

「あー。それに関しては問題ない」

狼はめんどくさそうに言う。

「零神家が完全にバックアップしてくれてるからな。連中の情報網を駆使すれば、探すのはそう難しくない。それにあの馬鹿警部補も色々根回ししてくれてるみたいだしな」

「零神・・・ってその殺人鬼の実家じゃないの？ アテになるわけ？」

「ああ。さっき言っただろ？ 勘当したって。それに、連中にとっちゃ奴は『汚点』だからな。とつとと処理したいとは思っても、躊躇うことはねえ」

「家族・・・なのに・・・？」

「どーでもいいんだろ、そんなこと。家族なんてもん、ただの構成単位にしか過ぎないんだからさ」

「狼も・・・そう思ってるわけ？」

零那は少し淋しそうに声のトーンを落とした。

「狼も、家族なんてどうでもいいって思ってるの？」

その問いに、狼は困惑した表情を浮かべ、頭を掻く。  
「んなこと言ってもな・・・」  
天井を見ながら、ぼつりと呟いた。

「俺は『家族』そのものを知らないから、正直分からねえよ」

3

司<sup>つかさ</sup> ゆうは、いつものように学校をサボりふらふらと繁華街を歩いていた。  
学校など今月に入ってから一度も行っていない。

ただただ風の吹くまま、気のままに繁華街をぶらつく毎日だ。  
別に学校で虐められているわけでもない。

友達がいなくてもいい。

ただ何となく。

ただ何となく、

学校をサボり、

繁華街をぶらついているのだ。

一人暮らしをしている彼女を咎める者は誰もいない。

北海道にいる父親に、学校から電話があるかもしれないが知ったことではない。

あの男は、顔と性格が人類という規格から外れまくっている最低な男だが、妙に律儀なところがあるらしく、愛人と遊び狂っている自分が父親にふさわしくないことをよく弁えており、父親らしいことを言ったことが一度もないのだから。

「さてさて、今日は何か面白いこと落ちてないかな」

ゆうはショートカットの橙色に染めた髪をゆらしながら、繁華街を見回す。

いつも通りの昼下がりの賑やかな風景。

これが休日や夜であつたなら、刺激的なことの一つや二つありそうところだが、残念ながら何もなさそうだ。

「うう。つまんない」

ゆうは小学生のように不平を言う。

正直、彼女は平均的な十六歳の体型にいささか足りてないので、見ようによっては小学生に見えなくもない。

「何かないわけ？ 白昼堂々ゾンビが襲ってきたり、殺人鬼が包丁持って暴れまくったりとかあ」

無茶苦茶なことを言いながら、学生鞆をぐるぐるまわす。

迷惑なこと、この上ない。

「あゝもうっ!! こんなつまんないんなら、家でいいとも見てた方がマシだよ」

と、彼女が怒りにまかせ先ほどより強く学生鞆を振り回したとき

鞆が、景気よく宙に舞った。

「あゝ」

鞆は大きく弧を描くように、よく晴れた青空をバックに うわあ・・・とっても綺麗宙を遊び、どさりとどこかに落下した。

「えーと・・・」

あの鞆、学校指定の鞆だからどうでもいいや　じゃなくて！あの中には確か食べかけの鯛焼きが　んなもんでもいい！みつちーから借りたMDが　もう貸した本人も忘れてる！

突然のことに彼女の脳の処理速度は限界を超え、軽いパニックに陥ってしまった。

「とつ、とにかく！　あの鞆には大切なモノが入ってるんだからあ！」

大声で叫いたため、通行人が驚いて彼女を見つめるが、そんなことに構ってる暇はない。ゆうは全力で鞆が落下したと思われる場所へと向かった。

そこは繁華街から少し外れた場所。

閉店した店が建ち並び、下ろされたシャッターにはスプレーで例外なく落書きされている。

そんな一角に潰れた鞆が打ち棄てられていた。

言うまでもなく、ゆうの鞆である。

「ちよつと汚れちゃったけど、これぐらいなら許容範囲ね」

鞆を拾って、軽く汚れを拭うと鞆を開ける。

財布、ケータイは自分で持っていたから、ここには入ってない。

教科書、ノートも何日も入れてない。

・・・あとは、手帳にリップにMDプレイヤー、MD数枚。文庫本数冊に、食べかけの鯛焼き　あ、やっぱ潰れたか　ブラシに小型のミラー。

それに

うん。

どうやら、落とした物はないらしい。

まあ、鞆が開いてなかったんだから当然か。

ゆうは鞆を肩に掛け、その場を立ち去ろうとする。

その時、ふと何かが視界に入る。

「人・・・？」

人影は落書きだらけの極彩色のシャッターにもたれ掛かり、地べたに腰を下ろしている。どうやら、男性のようだ。

ただの浮浪者なら素通りしているところだが、ゆうはそれをしなかった。

「すつごくカッコイイ・・・」

日本人離れた整った顔立ち。

別の世界から来たような錯覚さえ憶えるその顔立ちに、ゆうは思わず赤面しそうになる。黒いタンクトップに迷彩色のスラックスとラフな出で立ちが、男の鍛えられた無駄の一切ない肉体にとても似合っている。

そして、何より特徴的なのは男の髪。

脱色しているのか、それとも地毛なのか、日を浴び、輝くように揺れる白髪

「眠っているのかな・・・？」

スタイリッシュなサングラスに隠れ、目は見えない。

ゆうは、規則正しい呼吸から恐らく眠っているのだろうと判断した。

「でも何で？ ホームレスって感じしないけど」

ゆうがそう呟き、男の肩に手を触れようとした瞬間

男の手が、がしりとゆうの二の腕を掴んだ。

「ひえっ!？」

思わず、声が裏返る。

「あっ、あのですね？ わたし、まだそういうケーケンないんですけどお・・・」

言いながら、「こんなカッコイイ人なら襲われてもいいかも」などと不届きな思考が脳を駆けめぐる。

「貴様の」

男は掠れた声で呟く。

「えっ」

「空」

言葉を紡ぐ最中に男はぐったりと地べたに倒れ伏し、そのまま動かなくなる。

何が起きたのか分からず、ゆうもその場にべたりと座り込んでしまった。

「多数の目撃談から、奴はおそらくこの新宿のどこかにいる」

狼は弾倉<sup>マガジン</sup>に銃弾を込めながら、零那に言う。

その銃弾は普通の銃弾とは違い、狼男<sup>ワーウルフ</sup>などの半獣人<sup>ライカンスロープ</sup>を殺すためにハンターが用いる銀<sup>シルバー</sup>の弾丸<sup>バレット</sup>に酷似した銀色をした銃弾

それは俗に『結界弾<sup>ワケいだん</sup>』と呼ばれる、魔力<sup>マナ</sup>を封じる力を持つ特殊な銃弾だった。

この銃弾は『結界』の名の通り、結界の一種である。

他の結界同様、これは正確に言えば実体ではない。

というより、結界はそもそも実体を持たない。

だが、幾つもの結界を複合して組み合わせることにより、実体のように見せることが出来るのだ。

あくまでも見せているだけで、実体ではない。

それ故に、これを使用する銃は通常の銃ではなく、特殊な魔術式を組み込んだ銃でなければならぬ。

それが、狼の持つCZ75なのである。

「零神の情報網やら、亮の情報なんかを組み合わせれば時間の問題だ。包囲網完成間近。楽な仕事だぜ」

「で、そいつを見つけてどうするの？ 殺すの？」

「いや、能力封印するだけだ。後はどうなるうが知ったこっちゃない」

狼は全ての銃弾を込めると、弾倉<sup>マガジン</sup>を銃に戻し、構える。

「ねえ」

零那はぼつりと呟く。

「どうして殺さないの？ 初めて会った時からずっと、今の今まで誰も殺したことないよね？ 自分が死にそうなヤバイときでも、決して殺さなかった。ねえ、どうして？」  
「なっ」

狼は思わず、構えた銃を落とした。  
どさりと重い音がする。

「それは」

「任務だから？ それとも人間としての道徳心から？」

「・・・」

「わたしは、あなたが誰かを殺すという行為に怯えているような気がする」

「・・・そりゃあ、誰だって人を殺すのは怖いさ。それは普通の感情だろ？」

「ううん」

その問いに零那は静かに首を振る。

「あなたが怖れてるのは、多分普通の人とは違う理由から。違う？」

「・・・さあな」

狼は震える手でポケットから煙草と百円ライターを取り出した。

狼は普段全くと云っていいほど煙草を吸わない。

彼が煙草を吸うときは二つだけ。

気分を落ち着けると、

話の話題をはぐらかすときだけ

「別に、話したくないなら話さなくてもいい。でもね」

間を置き、静かに狼を見つめる。

「そんな甘いことやってたら、いつか死ぬわよ」

「それは」

「忘れないでね、狼」

零那は微笑を浮かべ、狼に言う。

「わたしが、あなたを殺すんだから」

「・・・そうだったな。忘れてた」

狼は自嘲気味に笑い、側に置いてあった缶コーヒーの空き缶に煙草を放り込んだ。

「それまで、死ねないな」

そう言う、狼の影はどこか普通の影とはどこか違った。

両肩に、まるで悪魔の翼のようなモノが生えた不気味な、影

「これって、はたから見れば男連れ込んでる事になるのかなあ・・・？」

結局、あの場に放置しておくことも出来ず、ゆうは自宅へと謎の男を運んだ。

ゆうの自宅は繁華街からそう離れていない場所にある、高級マンション群の一室だった。

元は家族で住んでいたのだが、両親が離婚してからゆう一人で住んでいる。

取りあえず、男をソファ―に寝かし、自分は乱雑に鞆を椅子へと放り投げる。  
「実はどこかの王子様だったりして」

ゆうは男の顔をまじまじと見ながら、そんなことを呟く。

「それが、異世界から来た勇者・・・うーむ。ベタネタかなあ？」

自分で言つて少し顔を赤らめる。

やはり、少し恥ずかしかったらしい。

「でも、本当に人間離れした顔ね・・・。整形かな？」

言いながら、ゆうは男のサングラスに手を掛ける。

途端、

「触れるな」

男の手がゆうの手を払い、

「あっ起きたん」

その手で、そのままゆうの首を掴んだ。

恐らく、このまま絞め殺すことも、首をへし折ることも可能だろう。

「・・・動じないな」

「そう・・・かな？ 結構怖がつてるつもりんだけど・・・」

ぎり。

首が、さらに強く締め付けられる。

「自分が今まさに死のうとしているのに、無関心とは面白い・・・」

「違う・・・ね」

掠れた声で、ゆうは言葉を紡ぐ。

「わたしは、全てにおいて無関心なのよ」

「ほう・・・」

男の手の力が弛む。

「わたしは、この世界で生きていても死んでいても大して変わらない。だって、わたしは空気と同じだから。誰かに影響を及ぼすことも、誰かに影響されることもない。何に対しても無関心。伽藍な心。それがわたし」

「・・・」

男の手が、ゆうの首から外れる。

「礼を言うのを忘れていた」

男は掠れるほど小さな声で呟いた。

「別に・・・いいよ」

「・・・そうか」

男は髪を掻き上げると、ソファ―から身を起こした。

「邪魔したな」

立ち上がり、男は玄関へと足を運ぶ。

運ぶ　が、

「ぐっ・・・」

そのまま、前へと倒れ伏す。

「怪我・・・してるの？」

「気にするな……ただの魔力不足だ。すぐ」  
「何分らないこと言ってるのよ」

ゆうはそんな男を抱き起こす。

「そんな体じゃ、どこかで野垂れ死によ。ニュースとかでアンタの顔見たら気まずいじゃない」

「そういう……ものなのか？」

「そういうものの」

ゆうは男の腕を自分の肩へと掛けるとソファアまで運ぶ。

「とにかく、具合が良くなるまでうちにいなさい。どうせ、ここにはわたしはいないんだから」

「……………」

「わたしの名前は司 ゆう。ゆうちゃんとかゆっちーとか好きに呼んでいいわよ」

「……そうか。では、司と呼ばせてもらおう」

「で、あなたの名前は」

「俺か？」

男は一瞬思案顔になり、やがて口を開く。

「空。それが俺の名だ」

「よう。どうだ？ 捜査は順調に進んでるか？」

ゲームセンター内でゲームに興じていた狼の肩をぽんと誰かが叩く。

「普通はそういうことを刑事が言わねえだろ。で、何なんだよ、亮」

狼はわざとゲームオーバーさせ、ゲームを終了し、デッキとICカードを引き抜いた。

「おいおい、別にやめなくなつていいんだぜ？ 大した話じゃないし」

「いや、ちよつと負けかけてたから」

「何やつてたんだ？ 見たことない筐体だけど」

「アヴァロンの鍵つてやつ。零那に勧められてな。やってみると意外に面白いんだ。格ゲーと違ってカードを使って対戦すんだよ。この紙に描かれたカードが画面の中で動くのが面白くて、一週間前に始めたけど、もうICカード二枚目だ」

「へえ」

「ほれ、こんなにキラカードも手に入つたんだぜ」

狼はにやりと笑つて、数枚のキラキラ光るカードを扇状にし、亮に見せる。

「……………お前、小学生か？」

「うるせー」

狼は少し赤面し、箱にカードとICカードをしまつと、懷に箱を入れる。

「で、どうなつたんだよ？」

亮は煙草をくわえ、ジッポで火を付ける。

「さっぱりだ。情報が全くない。有力な協力者もお手上げて感じだ」

狼は肩をすくめ、首を振る。

「実はさ、俺も何だよ。昨日から情報が いや、殺しがぱったりと途絶えてよ、もうどこにいても分かんねえ」

「どっかに潜伏してるんだろ？そういう場所、突き止められなかったのか？」

「ああ。まったくだ。おそらくこの新宿にいるということは分かっているんだけどな。それ以外はさっぱり。そう言うお前だって、潜伏先分かんなかったんだろ？」

「まったくな。どーなってるんだろ？」

「知らねえよ。魔法は俺じゃなくてお前の分野だからな、魔法使い」

「厳密に言つと、俺は魔法使いじゃねえんだけどな」

「？ まあいいや。どうせ、殺しが再会されれば、すぐに見つかるだろうよ」

「そうだな。果報は寝て待てと言っしな」

「そう言うことだ。じゃあな」

亮はそう言つと、煙草を近くの灰皿へと捨てる。

「・・・さて、俺はもう一ゲームやるかな」

狼は呟き、まだ筐体から取り出していなかったカードの入ったピローを抜き出した。

「さて、何が入っているのかな？」

ピローを破き、中のカードを確認する。

「光ってねえ。あゝコモンか・・・」

出てきたウサギのようなカードを見て、狼はげんなりと呟いた。

「たっただいまあゝ」

ゆづは舌つ足らずな口調で勢いよくリビングの扉を開ける。

「もう、良くなつたあゝ？」

「・・・ああ。それより、どうしたんだ？ 酒でも飲んできたのか？」

ゆづのハイテンションぶりに怪訝な顔で空は尋ねる。

「エヘヘゝ。ハズレゝ。これよ、これゝ」

ゆづは空に赤と白のセラチンカプセルを一錠、手渡した。

「覚醒剤・・・か」

空は少し嫌悪を含んだ表情で、掌のカプセルを見下ろす。

「残念でしたあゝ。合成麻薬だよゝん。これ、繁華街の裏通りでバイヤーから買ったんだけど、凄いいねゝ。二時間ぐらい前にやったのに、まだキいてるんだからあゝ。もっとも、お酒みたいになつと酔っちゃうのが難点なんだけどゝ」

「・・・何故、そんなものを買うのだ？」

「現実逃避かなゝ？ この世界から抜けれるじゃん、一時的にでもさ」

ゆづはどかりとフローリングにそのまま腰を下ろし、鞆を放り投げる。

「わたしさ、最近思つんだよね。クスリやつてる時とか、寝てる時とかの方が、『現実』なんじゃないかなあゝ？ って。本当は違つんだろうけどさ。でも、『現実』と『虚構』の区別って一体何なんだろうね？ わたしみたいに、ふわふわと漂っているように生きているような人間はたまに分かんなくなっちゃうのよ、自分の位置とかが」



ゆうは少し影のあるような口調で呟く。

「もしかしたらわたし、『現実』にも『虚構』にも存在していない人間なのかも。わたしの目には、この町並みが白黒の背景にしか見えないし」

「そうか」

空は呟くと、ゆっくりと自分のサングラスを外した。

西洋人のように青い いや、それ以上に薄い水色の瞳が顕わになる。

「俺には何もかもが白黒に見える。自分自身も。もちろん、お前自身も」

「あなた目が」

「先天的な目の異常だ。俺の目には色を感知する力がない」

言いながら、空はサングラスをかけ直す。

「俺も、自分が生きている確信が持てない。この白黒の死んだような世界で、俺は本当に生きているのか、死んでいるのか分からなくなる」

「……」

「俺は神に一つだけ願うならば、色が欲しい。だが、それは所詮無理な願いだ。だから俺は」

間を置き、右手を突き出す。

「人から色を奪うことにした」

近くにあつたブロンズ製の犬の置物に、その手を当てる。

鈍い音と共に、犬の置物が立方体状に剔られた。

「……あなたまさか」

「そう。俺は殺人鬼だ」

誇るわけでもなく、呟くように言った。

「司、死んでいても生きていても大して変わらないと言ったな？」

空はじつとゆうを見つめている。

「なら、この日常<sup>せかい</sup>から外されるのはどうだ？」

「どういう……意味」

「俺に 俺の、この『力』で殺される、という意味だ」

空は目線をゆうから自分の右手に落とす。

「今見た通り、この力は日常の常識から外れた力だ。故に、この力で殺された者は皆、常識から外される。皆、人間的な、普通の死を与えられないのだ……」

その狂気に満ちた兇器たる右手をゆうに向ける。

「ふわふわ漂っているより、ちゃんと地に足を着く所の方が落ち着くぞ。たとえ、そこ

が天国と地獄の狭間にある煉獄だとしても」

「……いいよ」

ゆうは素直な口調で言った。

「少なくとも、こんな世界にいるよりずっとマシだもん」

「……」

「わたしさ、去年、両親が離婚してさ」

ゆうは学生鞆から大事そうに一枚のテレホンカードを取り出した。

それは家族写真をテレホンカードにしたものだった。

真ん中に小学生ぐらいの時のゆう、その左右に彼女の両親と思われる者達。皆、笑顔だった。

哀しいぐらい、笑顔だった。

「きっかけは頭の悪いドラマみたいなもん。父親に愛人がいた。馬鹿らしいでしょ？ 発覚した後にドミノ倒しのようにどんどん壊れていつてさ。無茶苦茶だったよ。滅茶苦茶だった。ああ、家族ってこんなに脆く崩れるのか、人ごとじゃないのか、って思ったよ」

ぼたり。

テレホンカードに涙が落ちる。

プラスチック製のカードはその涙を吸うことなく、涙はそのままフローリングに落下した。

「それで、どうしようもなくぶっ壊れた後に離婚。市役所に離婚届を出しに行った後、母親は出て行った。この家から、わたしを置いて。その後に、父親も愛人の元に」

ぼたり。

ぼたり。

涙が、こぼれる。

「・・・その愛人がね、十八歳なのよ。どこで出会ったのか知らないけどさ いや、知りたくもないけどさ。考えられる？ わたしより二つ年上の人が愛人なんだよ？ 父親はそいつと結婚するらしいけどさ、たった二つ年上の奴を『お母さん』って呼ぶんだよ？ ・・・ふざけてんじゃねえよ!! 何なんだよ、畜生!! こんな不条理な事ってあるか!!」

叫びはやがて嗚咽に変わる。

彼女の中に溜まっていた毒を全て吐き出すように、嗚咽する。

「アンタは、こんな・・・こんな滅茶苦茶な世界を許せる？ 狂ってる。狂いすぎて狂ってる。時を刻む針も、巻くネジも、狂ってる。全部がイカれた世界を許せる!？」

「・・・だから、この世界にいたくない、と？」

「・・・そう。もう嫌なのわたし。こんな・・・こんな世界にいたくない」

子供のように泣きじゃくりながら、ゆうは言う。

「ねえ・・・家族って何なんだろうね？」

ゆうはテレホンカードを見ながら呟く。

「家族って、何なんだろうね？」

すぎるように、ゆうは空を見つめる。

「・・・さあな」

空は無表情に答える。

「俺も、それを知りたい」

ほんと、ゆうの頭に手を載せる。

優しく、載せる。

「お前の空は淀んでいる」

静かに、そしてどこか優しく呟く。

「故に、お前から色は奪わない」

その言葉が紡がれるや、ゆうは幼子のように空に飛びつき、胸の中で泣きじゃくった。

狼は深夜、一人コンビニに買い物に来ていた。

買うものは主に食料品。しかも、インスタント食品が中心だ。

理由は簡単。

零那は料理が出来ない。

しかも、一昔前のマンガのように『砂糖と塩を間違える』なんて可愛い真似ではない。

強いて言うなれば、兵器を生み出す。もしくは万物の法則をねじ曲げ、新たな存在を生み出す・・・そんな感じだ。

それならば狼が料理を作ればいいじゃないか、と思うだろうが、零那ほどでないにしろ、狼も料理を作れない。

三回に一回は消し炭が生まれる。

そんなわけで、魔術師<sup>マジシャンズ・ネスト</sup>の巣の食糧事情は大半が総菜屋かコンビニに頼っていた。

「二千円になります」

狼は財布から五千円札を取り出し、店員に渡し、釣りを受け取る。

「今月、結構ピンチだな・・・」

狼は受け取った釣り銭を財布にしまいながら、ぼやく。

狼の財布にはお釣りの夏目漱石さんが二人と小銭がいるだけだ。

それが、現在の全財産。

依頼料が入るまではかなり心細い。

「・・・しかも、この食料の大半があのお『大食い小娘』の胃袋に消えちまう。ったく、

奴はQ太郎か」

狼は悪態を吐き、レジ袋を受け取ると店を出る。

今日は熱帯夜。

ただ止まっているだけでも汗が噴き出るのに、狼は厚手の鉾のついた革ジャンを着ているから余計に汗が噴き出る。

それでもこの革ジャンを脱がないというのは、彼の信念のなせる技である。

狼はレジ袋からモナカアイスを取り出し、封を切ってかぶりつく。

冷たさで歯と頭が少々痛い、熱いよりはマシだ。

狼はモナカアイスをくわえながら、一人寂しい路地を歩く。

ここは新宿と言っても、昔ながらの下町を残したような小さな通りなので、誰にもすれ違わない。

「・・・火、ありますか？」

誰かと出会うことのほうが珍しい通りで、狼は後ろから声を掛けられた。

年齢は自分と同じくらい。

染めたのか地毛なのか、真っ白な髪と、何故か真夜中だというのに掛けたサングラスが特徴的な男だった。

煙草をくわえ、手にはオイル・ライター。

おそらく、オイル切れか何かで火がつかないのだろう。

「ああ。あるぜ」

狼はポケットから百円ライターを取り出し、男に放る。

男はそれをキャッチし、くわえた煙草に火を付けた。

紫煙が、深い闇に吸い込まれるように天に昇る。

「ありがとうございます」

男は礼を言って、百円ライターを狼に手渡す。

「ん」

狼はそれをポケットにしまい、再び歩き出した。

男も、狼と反対側の方向へと歩き出した。

互いに、互いを意識しながら

十に満たないとき、父親に勘当を言い渡された。

お前は、『力』を正確に継承できなかった愚息だ、と言いながら。

本家の敷居は二度と跨ぐな、とも言われた。

父親の目は氷のように冷たかった。

自分は怯えた顔で母親を見やる。

母親も、無表情だった。

もう、お前は家族じゃない

両親の声が重なった。

それから、自分は零神の分家筋に引き取られた。

座敷牢に幽閉された。

明かりも何もなく、真つ暗な世界。

そこから、一步も外へ出ることは許されない。

でも、自分は平気だった。

何故って、自分には色がないから。

日の下にいようと、日の当たらない所にいようと、変わらない。

自分にとって、世界とはテレビのようなものだ。

決して触れることの出来ない、ブラウン管に映る遠くの出来事。

それが、自分にとっての世界だった。

生きるって、どういう事だろう。

死ぬって、どういう事だろう。

・・・・・・家族って何なんだろう。

多分、それは色があるということなのだろう。

色。

色が欲しい。

本当に、欲しい

生きた実感が欲しい。

死ぬということを感じたい。

家族が

ほしい。

けれど、それは決して手に入らない。  
だから。

だからこそ、

自分は色を奪うことにした

「あ、狼。お帰り」

零那はソファで寝そべり、ツインテールをいじりながら気怠そうに言う。

「帰ってきたぜ、この大食い娘。何が、夜食がないと眠れないだ。普通、夜食ってのは寝ないから食うんだろ？」

「いーじゃん。人それぞれ違う夜食ってものがあってさ」

零那は狼から手渡されたレジ袋の中からメロンパンを取り出し、ぱくつく。

「見つけたぜ」

「ああそう」

零那はさほど感心がないのか、あっさり応えると食べ終わったメロンパンの袋を屑籠に放り込み、今度はおにぎり（ツナマヨ）に手を伸ばした。

「で、いつやるの？」

「準備・・・できるか？流石に大都会のと真ん中でやり合つのはキツイ」

「うーん。わたしは空間遮断は出来るけど、空間断絶は無理だしねえ。空間遮断は「これは結界だ」って外部の人間に感づかれる可能性もあるから、持続はしないしね。空間断絶なら文字通り、一時的に空間を外界から切り離すから、気付かれる可能性も薄いんだけどさ」

「十分でいい。それだけあれば、奴を仕留められる」

狼は片眼鏡を人差し指で押し上げ、言った。

「・・・で、場所はどすんの？」

「スラム街がいい。あそこなら、多少ぶつ壊れてもお偉いさんは気にしないからな」

「そうか・・・。じゃあ、下見しないとな。舞台が整うまで一週間はかかるよ」

「早いほうだ。幸い、奴さん<sup>やつこ</sup>新たな犠牲者は出してねえし、亮に何か言われる事あねえだろ」

「分かった。じゃあ、やってみる」

言うや、零那は立ち上がり、台所の方へと向かう。

「しよっぱいもん沢山食べたから、のど渴いた」

見ると、膨らんでいたレジ袋はいつの間に減量したのか、やせ衰えていた。

「・・・全部、食ったのかよ」

狼はそれを見やるや、げんなりと呟いた。

翌朝、零那は<sup>マジシャンズ・ネスト</sup>魔術師の巣から少し離れた位置にあるスラム街へと足を運ぶ。

ベースボール・キャップを被り、白いプリントシャツに膝が破れたジーンズとラフな格好で街を歩く。

こういう場所では変に地味だったり、派手だったりするよりかは普通の服の方が目立たないで済むのだ。

零那の今回の目的は結界を張る場所を見極めることにある。

空間を何らかの理由で長時間外界と切り離す際、結界は術者個人が維持するには大量の魔力<sup>マナ</sup>と精神力を必要とする。

故にそれを軽減するため、空間を長時間操作する際には術者は札を使用するのだ。

札に使用する結界の術式と一定量の魔力を封じ込め、結界を張るエリアの四方にそれを張ることによって、術者が結界を維持せずとも結界のは持続される。

泣き所は、その札を一つでも破壊されれば結界は瞬時に解除され、元の空間に戻るからだ。

それ故に、結界を張る際、結界師は他の人間に張った札を悟られぬよう、綿密に下見をし、他の人間の死角となる場所に結界を配置する。

零那もそれを探す為に、わざわざスラム街へと下見に来たというわけだ。

「大体ここら辺の地理は把握したから、あとは札を創るだけ、か・・・」

零那は小さなメモ帳に詳細を書き込み、ジーンズのポケットに入れる。

正直、こんな所にいつまでもいたいものではない。

何かの腐った臭いで空気が淀んでいるし、ジメジメしている。

零那は晴れた日が好きだ。

雲が一切なく、からつと晴れた日は心躍る。

逆に雨は嫌いだ。

土砂降りの雨は嫌いだ。

あの日のことを思い出させるから。

家族を失った、あの惨劇を思い出させるから

「もし、もし、本当にこの殺人鬼がわたしの家族のことを殺したのだとしたら

ぎりり、と歯ぎしりする。

手に、力が入る。

眼に、殺意が灯る。

もう、あれから半年以上経っているというのに、未だに震えが止まらない。

「わたしが、殺す」

たとえ、人殺しと罵られようとも、

地獄に堕ちようとも、

人の道から外れようとも、

全ての責任と罪をわたしは背負う。

「狼・・・アンタは甘いよ」

どんなに窮地に立たされようとも、決して殺すことを選ばない男。

自分は彼の過去は何も知らない。

でも、やはり甘いと思う。

今時、正義のヒーローは流行らない。

正義のために己を顧みない人間なんて奴は、ただの自己陶醉に浸る偽善者だ。彼がそんな人間でないことは理解しているけれど

「被害者にしか、被害者の本当の気持ちなんて分からないんだよ」

目蓋に、涙が溜まる。

いつの間にか、泣いていた。

零那は涙を拭く。

その時、ふと視界に一つの人影が入った。

どこかの学生なのだろうか。

蜜柑色のベストに、ねずみ色のスカート。

シヨートの髪は橙色に染められている。

道に迷ってしまったのだろうか。

それなら、かなり拙い。

ここは普通の繁華街なんかより数倍危険な場所だ。

素人が、しかも女子高生が、こんな所にいれば力モにされるのは火を見るよりも明らかだ。

そう思い、零那は彼女に声を掛けようとする。

「あのさ」

「はにやにやつ!? い、いやわたしは別に危ないクスリなんて買ってませんよ!? もう、空に言われて足洗ったんだからねっ!!」

「・・・じゃあ何で、ここにいるのよ?」

零那は半眼で少女を見やり、げんなりと呟く。

「い、いや、な、何でも。別に・・・ただ道に迷っただけですよ?」

「ただ道に迷っただけなら、何でそうキョドってるのよ?」

「あつ・・・あはははは。じゃっじゃあ、失礼しましたあゝ!!」

少女は渴いた笑いと共に、脱兎のようにその場から去る。

一人残された零那はぽかんと口を開け、その様子を暫し呆然と見つめていた。

「ま、よくいるアホなジャンキーか」

・・・でも、変な娘だったなあ

零那は、ぼりぼりと頭を掻く。

「Hh・・・か」

殺人鬼 零神 空

・・・まさか、まさかね?

それに、あの娘

「なあーんか、あの娘、自分のこと鏡で見てるみたいだったわね」

というよりか、自分そのもの。

複製とまでは言わないまでも、あそこまで酷似している人間に出会うというのも珍しい。

「でもま、世の中には自分にそっくりな人間が三人いるっていうしね」  
零那は深く考えることをやめ、スラム街を後にした。

「たっただいまあゝ」

「帰ってきたか、司。で、どうだった？」

「うん。あそこなら殺り合っても平気よ。あのスラム街は住人はほとんどいないから。いても危険を察知してその場から立ち去るわ」

ゆうは学生鞆を下ろし、ソファアに腰を下ろす。

「ねえ、逃げるとか、そうやって戦わない方法はないの？」

「ないな。逃げてでも奴らは追ってくる。ならば、先に殺すまでだ」

「そう か・・・」

ゆうは哀しげに目を伏せる。

「ねえ、やっぱりアンタを追っている人間って警察とか公安？」

その問いに、空は首を振る。

「俺の家族だ」

「えっ」

「処分する理由としては、俺が殺人鬼だからということもあるが、一番の理由は俺が未覚醒者だからだ」

「未覚醒者？」

「魔術師は、『手』と『眼』の両方を覚醒させた者のことを指す言葉だ。どちらか片方しか覚醒できなかった者は未覚醒者と呼ばれる。確か、西洋魔術師達はウィズダム・ウイザードと呼んでいるがな。俺は『手』しか覚醒出来なかった失敗作でな。故に実家から処分命令が下っている」

「・・・どうして、未覚醒者は殺されなければならないの？」

「さあな。ただ、未覚醒者は世界を滅ぼすという伝説がある。恐らく、その為だろう」

「伝説 为什么呢？ 迷信で殺されなければならぬわけ？」

「信仰の前には何の論理も歯が立たない。言うだけ無駄だ。それに、未覚醒者が人間に危害を加えるのは本当だ。精神が不安定でな、いつ誰かを殺しても不思議はない」

「・・・だから、あなたも人を殺すの？」

「いや。俺は自我がある。奴らは見境無く殺す。そこが違う」

「人を殺すことに違いがあるの？」

「さあな。ただ、軽い命と思ひ命があるのは確かだ」

「・・・そう、だよね・・・でもさ、わたしは人を殺すのはどんな理由があってもいけないことだと思ふの。それは人の物盗んじやいけないとかっていう、道徳心からじゃなくて、もっと根本的な所から来る理由だと思うの。何て言えばいいのかな、人間じやなくなるとか、そういう感じ」

「大方正しいな。事実、人を殺した者は人間という道から外れる。外れた者は二度と元には戻らない」



「なんかさ、滑稽だね。それって」  
「・・・確かに滑稽だ」  
空は顔を歪め苦笑する。

サングラスで隠れた瞳は、どこか遠くを見つめていた。

「人を殺すことしか知らぬ者は、人を殺すことでしか生を実感出来ぬのだから」

「取りあえず、準備は整った。後は、どう誘き出すか、だ・・・」

狼は事務机に足を投げ出し、ダーツの矢を構えながら呟く。

「果たし合い状でも書けば？」

「馬鹿。どこにいるか分からない相手にどうやって届けるんだよ？ それに、んなもん届けたら普通とつと逃走すんだろっが」

「そりゃま、そうだろうね」

「やつば、どこにいるか突き止めるしかねえのかな・・・。ったく、一体どこにいるんだよ？」

「狼が見たっていう日から、もう二日も経ってるのよ？ とつくにこの街から出てるってのが普通じゃない？」

「いや、あん時の奴の魔力の残留が残ってる。奴はまだこの新宿にいるぜ」

「じゃあ、その残留を辿ればいいじゃない。犬なんでしょ？」

「ちげーよ。俺は才オカミだ。馬鹿犬と一緒にすんじゃねえ」

狼は忌々しく言つと、ダーツを放つ。

ダーツは直線を描き、標的ターゲットの中心へと突き刺さった。

「準備が出来てもどこにいるか分かんなければ意味がねえ。零神も亮もお手上げ。ったく、どうすればいいんだよ・・・」

「どっかのアニメみたいに駅の掲示板に書けば？」

「WXYってか？んなもん、今時誰も見ねえよ」

「それもそうね」

「あーあ。あつちから出向いてくれればいいんだけどな」

「そりゃ、無理でしょ」

「畜生・・・、あゝ何かいい手はねえかな」

狼は気晴らしにパソコンのメールボックスをいじくる。

見れば、メールが一件。

「ほほう・・・あつたじゃねえか」

狼は片眼鏡を押し上げ、邪悪に嗤う。

そのメールの件名は、『果たし合い状』だった。

自分はその日、一人の男に出会った。

年はおそらく五十ほど。  
白髪之交じる短く刈りあげた黒髪と、意志の強い眼差しを持った武闘家のような男だった。

何かの事故で失ったのだろうか、男の左腕には無骨な鉄の義手  
自分は彼を殺そうと思った。

彼の色を 空を奪うために。

だが、それは出来なかった。

「喝」

彼の一声で、

体が動かなくなった。

男はつまらなげに自分を見つめる。

そして、

「愚か者め」

ただ、そう低く呟いた。

「貴様はこのセカイをどう思う？」

男は自分に問うた。

自分は何も答えない。

・・・何も、言えない。

唇が、震えていた。

恐怖。

怯えて・・・・・・いる？

「・・・・・・ふん」

男は鼻を鳴らし、自分に侮蔑の視線を送る。

「まあいい。だがな、小僧」

男は屈んで、自分に視線を合わせる。

「このセカイは管理された箱庭だ。それを覗き込んで笑っている奴がいる。それを忘れるな。未来なんてモノは、誰かが創ったレールにしか過ぎん」

男は言い終わると自分に背を向け歩き出した。

「・・・あなたは・・・何をするために生きているのですか？」

立ち去ろうとする男を呼び止め、言葉を紡ぐ。

どうして、生きているのか。

この男は自分には決して分からぬその答えを知っているような気がした。

「人間に戻るため・・・だな。いや」

男は自嘲気味に笑い、言った。

「私は常に死と生タナトスの狭間エロスにいるようなモノ故に、生きているというのは厳密には正しくない。ただ、在るだけと言う方が正しい」

その言葉に、

自分は親近感を憶えた

時刻は午前二時。

不夜城めいた新宿は未だ人々の喧噪が絶えない。

ネオンが輝き、星すらも見えない夜。

太古の昔　月明かりが夜のただ唯一の光源だった頃、人は夜を恐怖し、夜が明けるまで静かに待った。

それが、明かりの登場によって、人は夜の恐怖を克服する。

明かりは発展し、やがて月明かりを葬るまでになった。

ちようど、このネオンのように

どんなに刻が経とうとも、人の本質は変わらない。

明かりを求め、暗闇を恐怖する本質は。

「お前もまさか、ここを戦場に選んでいたとはな・・・」

狼は下卑た笑みを浮かべ、男を見る。

ここはその都会の喧噪から外れたスラム街。

賑やかさなど一切なく、恐怖が支配する世界。

外れた者達の　夜の世界の住人達のさやかな居場所・・・

「ここはほとんど人間が住んでいない。俺達が戦うには絶好の場所だ」

男　零神　空は油断なく身構え、静かに言った。

「殺人鬼がよく言うぜ。お前の人外な力で死んだ連中、合計十二人。あんなに公に晒されたんだ。今更隠してもしょうがないだろう？」

「だが、貴様は困るだろう」

「ご親切にありがとう。でも、俺達には人間としても生物としても存在としても最低ラ  
ンキング堂々第一位な国家権力がついてるから、隠すのはたやすいんだよ。まあ、そうい  
うことが起きないようにする事には越したことはないんだが。奴に借りを作るのはかなり  
ムカツクから」

言いながら、狼は男に向け銃を構える。

「・・・それが、能力封印の魔銃か。貴様の噂は色々聞いているぞ、神鎌　狼。かつて、  
異界で殺戮中毒者と呼ばれ、一度に十人以上を虐殺した人間が、今では異界の七太祖に飼  
われているとは、随分と憐れだな」

「随分と詳しいじゃねえか」

「詳しくなければ、貴様のメールアドレスなど知らん」

「だろうな」

「ねえ・・・」

今まで黙っていた零那が重々しく口を開く。

「・・・一年前の六月六日神奈川県で、アンタ誰か殺した？」

「・・・誰だ？　貴様は」

「結真　零那よ。いいから早く質問に答えなさい」

「結真・・・ああ、芦屋の分家筋か。知らん。その日は長崎にいた」

「そう・・・」

違ったか・・・

零那は内心で舌打ちした。

「しかし、結真とはな・・・」

空は零那をしげしげと眺め、言った。

「実験動物が」

「!?」

「どうやら、何も知らんらしいな。その男に何も吹き込まれなかったようだな」

「やめろ」

「不思議に思わないか？ 貴様の血筋の人間がみな早くに亡くなることを。それだけではない。奇形児も多い。早死にに関しては、女性は特にそうだ。長く生きても、子供を出産した後に死ぬ。何故だか分かるか？」

「やめろっ・・・!!」

「はん。名を与えられ、腑抜けになったか、神鎌 狼！ お前とて、無関係ではあるまい。お前の飼い主、香耶 流奈の家は俺達零神家の本家であると同時に、結真家の本家でもあるのだからな！」

「貴様っ・・・!!」

「教えてやろう。貴様の家系は、本家香耶の力のである結界の力を極めるために、何百年と自分達の血を濃くするよう一族同士で交わってきた。この意味分かるよな？ 特に、貴様の母が貴様を産んだときは、自分の実の兄とダン。」

渴いた間の抜けたような音

見れば、狼の手に持つ銃からは白い煙が立ちこめていた。

「結界弾・・・ではないな」

「ああ。実弾だ。これ以上喋ったら、脳天ぶち抜いて脳漿を周囲に晒してやる」

「出来るのか？ 殺すことの出来ない殺人鬼より殺人鬼に」

「うるせえ。殺すことしか出来ない殺人鬼よりはマシだ」

狼は懷から別の弾倉を取り出し、交換した。

「生きて詫びろ。テメエの罪は地獄の閻魔様も匙投げた。生きて償い続けろ」

そして、銃を再び空へと構える。

「地獄からの使者が、勝手なことを」

空もそれに応じるよう、自分の右手を構える。

「零那、今だ」

「・・・うんっ！」

零那ははつと我に返り、急いで自分の設置した結界を発動させる。

「空間遮断か・・・」

「ああ。これなら、誰にも気付かれないだろ？」

「そのようだ」

刹那、空の体が消える。

「ちっ・・・!!」

跳躍。

空の体は地上数メートルまで浮かび上がり、一気に狼のいる地上へと落下する。  
「やられるかつ！」

狼はその落下する空の体へと、結界弾を叩き込む。  
が、

「何だ?! あんにやろう、結界弾を破界しやがつた!! 反則だろ！」

狼は舌打ちし、右手に握られた結界弾だった粒子を見やる。

いくら、攻撃を無効化されたからとはいえ、そのまま呆然と立ちすくむ余裕など、狼にはない。

狼は落下してくる空の体から身を守るがごとく、別の場所へと移動する。

そこは、捨てられたトタン版やらドラム缶が遮蔽物となっていて、狼には絶好の逃げ場である。

・・・一時的には、だが。

接近戦に持ち込まれば不利だ。

あの攻撃をまともに受ければ、いかな狼といえただでは済まない。

「ハアッ!!」

空のその長い腕が大蛇のように撓り、狼へと襲いかかる。

「なんのっ」

それを懷から取り出したナイフで受け止め、防御する。

空の掌を捉えたはずのブレードが、音を立てて四散した。

「ちいつ」

柄だけになったナイフを放り捨て、狼はすかさず第二第三の結界弾を放った。

しかし、それら全ては空の体を捉える以前に破界され、霧散する。

「・・・無駄だ」

「やってみなくちゃ、分かんねえぜえ」

再び放たれた右腕を狼は近くにあった鉄パイプで受け止めた。

「何度やつても同じことだ」

全ての存在を喰らい尽くし、破界し尽くす。

極限まで高められた人外の技。

「化け物が・・・」

悪態を吐く。

自身の体の内に眠る魔力<sup>マナ</sup>の全てを純粹に破壊することのみに注いだ零神の究極奥義。

破界。

破壊される、というよりかは喰われる、という表現の方が相応しい。

あの両腕が化け物の顎のように対象に喰らい付き、その存在をセカイそのものから外してしまう。

音には聞いたが、まさかこれほどとは

「貴様とて、人外には違いなйдらう？」

両手を熊手状に構え、周囲を遮蔽物だけでなく空間ごと立方体状に破界しながら悠然と

零神 空は歩を進める。

「はん。それもそうだなっ!!」

狼は素早く、自分の革ジャンのポケットに押し込んでいた砂を空へと撒き散らした。

「ぐっ・・・目つぶしかっ!」

僅かに、動きが鈍る。

「ああ、そうだよ。いくらテメエでも粒子の細かい砂は一つ一つ破界出来ねえだろ!!」

すかさず狼は銃を構え、不敵に嗤った。

「これで終わりだ、殺人鬼イイイイ!!」

狼の瞳が、紅く輝く。

刻すらも止める魔眼 凍結眼が零神 空を捕縛する。

引き金に力が込められ、

そして、結界弾が、放たれる。

その弾は放物線上を描くように、空の頭部に

「痴れ者が」

「!」

見れば、空の右手にはひしゃげた結界弾が握られていた。

それはそのまま、立方体状に切断され、消えていった。

「お前まさか」

「ああそうだ。貴様の投げた砂と、貴様の切り札であるその魔眼の力、共に破界させてもらった」

「んな・・・砂はともかく、凍結眼の力だけを破界することなんて」

「出来るさ。俺の力は物体を切断するのではなく、空間そのものを切断する力。貴様の眼の範囲にある力を空間ごと破界することなど容易いことだ」

「マジモンの化け物だな・・・お前」

狼は引きつった顔を浮かべ、その姿を見る。

「貴様の空は何色だ？」

自分の腕が届く距離にまで間合いを詰め、空は問う。

「はっ、知らねえよ。自分で見てみればいいじゃねえか」

「俺はそれが出来ぬから、人から空を 色を奪う」

「そうかい。それが殺しの理由か。随分とロマンチックだな。殺人鬼やめて芸術家になれよ」

「殺人鬼と芸術家は確かに通じるところがあるな。両者とも、狂人だ」

「確かに」

狼は嗤った。

「・・・確か、芸術家は結構非業な最期を遂げる奴らが多いよな。テメエもその一人にしてやるぜ!」

零距离射撃。

この距離ならば、外すことはない。

銃弾は真っ直ぐに、奴の頭部に直撃する。そう。

この引き金を引けば

「貴様は学習というものを知らぬらしい」

その空の右腕は、雷火を迸らせながら、狼の右腕の上腕部を握り

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

狼の右腕を肩ごと破界した。

だくだくと流れる、血。

この出血ではいずれ、血が無くなり死ぬだろう。

その証拠に、鮮やかな血に混じって、どす黒い血が混じっていた。

「そのまま、放っておいても死ぬな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!」

「ふん。実にいいぞ。その眼。先ほどと違って、まさしく殺人鬼の眼をしている。所詮、

貴様も殺人鬼よ。どんなに否定しても本質は変わらない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「貴様を選ばせてやろう。そのまま死を待つか、今すぐ楽に死ぬか」

「狼っ・・・・・・・・!」

今までずつと見ていた零那が、空の眼前に立つ。

「どけ、結真の娘。俺は貴様を殺すつもりはない」

「何でよ、殺人鬼なんでしょ？ 一人ぐらい殺すのは簡単でしょ？」

「何故、だろうな・・・」

零那の問いに、空は呆然と呟いた。

明らかに、動揺している。

自分が何故、そのような言葉を紡いだのか、分からないとも言つように

「さあ、答えなさい」

零那の周囲で、様々な物体がねじ曲がる。

「答えれば、その間だけ死期が長くなるわ」

空間をねじ曲げ、物体をねじ切る力

その力が、零那を中心とし、渦を巻く。

「ぐっ・・・・・・・・」

それでもなお、空は零那を攻撃することはなかった。

まるで、何かに怯えるように。

それは畏怖とはまた違う、恐怖

「さあ」

『曲脱師』と呼ばれた芦屋の分家、結真。

その瞳は全ての事象をねじ曲げる。

物体ですら。

空間ですら。

その瞳を眼前にしてもなお、空は身動き一つ出来なかった。

「迷っているなら、こっちから行くわ」

すでに零那の周囲の空間には、建築物でさえ直立しているモノは存在しない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

空は震える右手を零那へと突き出す。  
迷っている。

自分が？

迷っている？

何を？

迷っている？

どうしてだ？

どうして、迷っているのだ？

何故？

何故？

何故？  
？

「何かよく分からねえけど、形勢逆転ってやつか？」

「貴様、いつの間に」

見れば、狼は左手で銃を構え、空の眼前に佇んでいた。

腕のなくなった出血する右肩を強引にシャツで止血し、破れた革ジャンはその辺に脱ぎ捨ててある。

「ったく・・・お気に入りの革ジャンをよくもこうしてくれたな。高いんだぞ？上物だから、十万じゃ買えないんだぞ」

「あの出血で・・・どうやって」

「ああ、マンガとか映画のお約束の台詞、『俺って血の氣が多いから少し減ったって変わんねえ』ってヤツだな、きつと。やっぱ、主人公はこうでなきゃ」

「は・・・」

空は先ほどの狼のような、引きつった笑みを浮かべる。

こいつは間違いなく人外だ。

力はおそらく、自分と互角だろう。

だが、奴はそれだけではない。

あの、死地までも脱せる力。

生命力などという言葉では語れまい。

まさに、運。

それも、とてつもない悪運。

力を持ち、さらには運までもを味方に付ける男。

まさに、人外。

常識の規格から外れたなんてものじゃない。

セカイそのものから外れた異常者。

人外の中の人外。

神鎌 狼

神すらも刈る、鎌を持つ男

「何だよ、笑えよ」

狼はふてくされたように、言う。

奴は。



奴は、

まるで、あの男と同じじゃないか

「まあいい」

狼は邪悪に嗤い、引き金トリガーを引く。

その笑みは、取引を持ちかけるメフィストフェーレスの笑みに等しい。

「俺の生活費のために、封印される」

ダン。

先ほどの銃声より、やや重い音。

今度は外さない。

銃口から発射された破魔シルバー・ブレットの銀弾は放物線を描き、真っ直ぐに対象者である零神 空の頭

部を貫いた。

血は出ない。

その銃弾を受け、空はがっくりと膝を折り、その場に倒れ伏した。

そして、そのまま気絶。

「封印完了。ちゃんと十分以内に片付けただろ？」

狼は呟くと、その場によるける。

結界が解除され、周囲は元のスラム街へと戻った。

「狼っ……！」

「ああ、やつぱちよつと貧血気味。どうやら、俺は血の気多くないみたいだ……」

「何言ってるのよ、右腕まるごとないのよ？ 早く病院に……！」

零那は狼を支えながら、血相を変え言った。

「ああ、やだ。二度と腕使えなくなるから。あと、零那、俺の革ジャン取ってくれ。そ

んで、俺に着せて。この状態じゃ、ちよつと無理だし」

狼は、元々自分の腕を持ちながら言う。

「どうせ使えないでしょう？ その腕」

零那に革ジャンを着せてもらいながら、狼は言う。

「ああ。この腕は使えないな。あとで、亮に処理してもらうか。変なところに捨てて、

色々変なことになってもやだし」

「狼っ！」

「平気だよ。腕のいい義体師を知ってるから。これから御名羽市に行く。あゝでもあの

ジジイ、また変なこと言って料金ふっかけそうだな……」

「狼、なんでそんなに喋るのよ！」

「なんか最終回みたいだろ？」

「冗談言っている場合じゃないでしょう！」

「……あいつの言っていたこと、気になるか？」

狼はヘラヘラ笑うのを止め、零那に尋ねる。

「……気にならないと言ったら、嘘になるかな。でも、言わなくていいよ」

零那は少し淋しげに言った。

「わたしに、知る覚悟が出来るまで」

「そうか」

狼は静かに呟く。

「空！ 大丈夫っ!? ねえ！」

突然、後ろの方から少女の声がする。

蜜柑色のベストにねずみ色のスカート。

ショートカットの髪は橙色に染められている。

「まさか、死んじゃったの!? 起きてよ、ねえ！」

少女は倒れている空を揺すり、叫ぶ。

「大丈夫だ。死んでねえよ」

狼は荒い息と共に言葉を吐き出す。

「ただ、能力は封印された。もう奴は、力を使えない」

「そうですか」

少女は静かに呟いた。

「あなた、その腕」

「ああ。ないよ。コイツに破界された」

「・・・あなた、死んでいないわね」

「ああ。この通り、憎たらしく生きてるよ」

「よかった」

少女は空を抱きしめ、静かに涙をこぼす。

「わたし、彼と一緒に生きます。彼の罪も、彼と一緒に背負います」

「・・・人殺しの罪なんざ、分かち合って背負えるほど軽いもんじゃねえ」

狼は少女に一瞥をくれ、言い放つ。

「・・・でも、多分、コイツに取っちゃそれが一番いいんだろうな」

「？」

「いや、なんかコイツを見ると、誰かを思い出してな」

狼はそう言くと、零那に支えられ、歩き出した。

「ねえ、狼」

「ん？」

「あの娘、わたしに似てない？」

「そっくりだ」

狼は自嘲気味に笑う。

「もう、奴は誰も殺さないだろうな」

「どうして、そんなことを？」

「あいつは、『色』を手に入れた。もう、人を殺す理由が無くなったってことだ。これ

から、どうするかは、まあ、アイツらの問題だ。俺達の知ったことじゃねえ。とにかく、

奴は人殺しはしねえ」

「そういうモンなの？」

「そういうもんさ。殺人鬼ってのは、いずれ人を殺せない殺人鬼になるんだ」

「へ」

「それよりさ、零那。もう少しゆっくり歩いてくれよ。傷が痛い。腕、完全にぶった切

れてんだからさ」

「我慢しなさい、男でしょ？」

「女になろっかな？」

「ばーか」

「・・・家族ってさ」

狼はぼつりと呟いた。

「血縁とか、そういうもんじゃなくて、日々の営みで形作られるもんなんじゃないのか  
な？ 俺は家族なんて知らないから、分からないけど」

「・・・そっだよ、きつと」

零那は瞳を潤ませ、言った。

今日は七月だというのに、風が冷たい。

その風が、頬に触れて気持ちがいい。

「ねえ、狼」

「ん？」

「わたしも、あの娘と一緒にあなたの罪を背負う」

「そうか」

狼は静かに呟き、夜空を見上げる。

大都会だというのに、今日は星が沢山瞬いていた。

「じゃあ、俺もお前の罪を背負う」

「えっ」

「殺すんだろ、俺のこと」

「・・・そっだね」

言って、零那は笑った。

それは久しぶりの、彼女の本心からの笑顔だった。

がちり。がちり。がちり。

・・・がち。

欠けた歯車は回りにくい。

間に噛ませる歯車がない絡繰りは動かない。

動かない。

正常に、動かない。

だが。

歯車には回り続ける他に存在価値はない。

たとえ、壊れていたとて、正常に動かないとて、回るしかない。

それが歯車の宿命。

哀しい宿命。

絡繰りを失っても回り続ける滑稽な歯車の宿命

「あれが」

「はい。あれが世界の誤植、システムのバグ。我らの最も忌むべき存在です」

「・・・邪魔だな」

「お任せください。私は今のまま監視を続けます。もし、何かあれば、すぐさま報告するつもりです」

「頼んだぞ、遠眼鏡。奴はバグ故に何を為す者かすらも分からんだ」

「なあ、機巧<sup>からくり</sup>。あいつの名前なんて言うんだ？」

三人の中で一番粗野な男が、尋ねる。

「ああ」

機巧と呼ばれた男は暫し思考し、口を開く。

「神鎌　神鎌　狼だ」

「ふん。俺が、剔つてやんよ。ギタギタにな」

男は肩に担いだ、自分の背丈ほどある巨大なバタフライナイフを展開させる。

その不揃いな刃はナイフの刃というよりかは、子供の壊した鋸。

一見すると切れ味の悪そうなそのジグザグの刀身は、素人目でも通常の使用をするモノでないと分かる。

この得物は恐らく、対象者を『斬る』のではなく、『剔る』為のモノ。

一撃で対象を殺さず、剔り殺すための玩具

「言うな、逢魔<sup>おうま</sup>。お前はセカイに干渉しすぎる。お前を使うのは最後の手段だ」

機巧は逢魔を制す。

「まずは監視だ。それから、奴の処置を決定する」

「我らが歯車集団<sup>システムズ</sup>の円滑なるシステム運営のために、か？」

茶化すように、逢魔が言う。

「ああ」

「よくやるよな、『あの日』以来、仕える主すらも失ったつてのによ」

「それでも、歯車は回り続けなければならないのだ。回ることで、歯車に存在価値はない」

「確かに」

遠眼鏡が、静かに呟く。

「壊れたセカイを動かすには、壊れた歯車が似合いだろうよ」

「三、白黒の空ノ了」